情報化時代における日本と東アジア・東南アジアの価値観の比較研究
―「もののあわれ」等に関わる「内面」の問題を中心に―

“Mono no aware” and the Related World Views in Japan and Asia

仲田　誠
NAKADA Makoto

Abstract

In this paper, I focus on the following points: 1) why do we find the presence of Mononoaware-senstivity(a subtle sensitivity to nature and life) in modern Japense mind?; 2) why is this Mononoaware-sentivity found to be related to various views on politics, environmental problems, robethics, information ethics in spite of separation between them in terms of ‘logical meaning’?; 3) how can this kind of Japanese inner mind be compared to those of other cultures and societies in East Asia and South East Asia? I will examine these points by analyzing my research data I have collected and related literature on this subject.

Key words：Mononoaware-sensitivity, Japanese inner mind, information society, Japan and Asia, Roboethics
キーワード：もののあわれ、日本的内面、情報社会、日本とアジア、ロボット倫理

Ⅰ．概要

本稿の狙いは、情報化、グローバル化が進む現代日本における「内面」の問題、(self-) identificationの問題について考え、さらに、アジアの住民同士の「内面」の比較、対話の可能性について各種資料、関連文献、調査データの内容を踏まえながら考えていくことである。具体的には、「もののあわれ」的なものの見方の解釈を中心に、以下のような諸点に関する考察を進めていく。１）近年筆者自身が実施した情報社会に関する日本やアジア各国での調査の結果を報告する。２）日本的な価値意識に関する文献を読み解きその内容を整理する。このことで、（１）情報社会における人々の「内面」（価値観）と外的環境（情報環境、社会環境など）との関係について詳しく分析する。またそれをもとに（２）情報化の問題を「存在論」や「生世界」のレベルまで引き戻して考察する。この場合、「存在論」や「生世界」のレベルにまで引き戻すとは、言語の働きや述語的な論理の働きにも関わる「内的」な意味の世界の構造に注目して論を展開す

るということである。（３）さらに、こうした諸点の分析を踏まえて、日本、東アジア、東南アジアの価値観を比較し、地域に根差した情報社会論や情報倫理の議論の展開をめざす。今回の分析では、日本的な価値観の内容を新たなデータに基づきさらに詳しく分析するとともに、日本のデータを東南アジアのデータ（ベトナム）、東アジアのデータ（台湾）とも比較する。

II．問題の出発点・「もののあわれ」と「世間・運命観」

筆者は、1981年に岩手県大船渡市およびその周辺地域で「天譴論」、「日本的自然観」、「日本的運命観」などに関する質問を織り込んだ災害観調査を実施し、「日本的災害観」を深層の部分から捉える試みを行った。おそらくこれは「天譴論」や「運命観」を含む日本的な災害観を実証レベルで明らかにしようとしたという点で日本で最初の試みであったと思うが、これはもともと、文献資料のリサーチを通じて、仮説としては明らかになっていた日本的災害観を実証のレベルで明らかにしようとする狙いに基づくものであった。（最初の調査は、東京大学新聞研究所の廣井脩助手らと共同で行ったが、日本的災害観の重要性を提起し、その内容に関する仮説を提示し、さらに具体的な質問内容を提案したのは筆者である。廣井氏との共同研究では、欧米には「天譴論」はないのかという点なども問題にされた[1]。）この調査によって、日本人の心の中に、「運命観」や「（ある種の存在論的）自然観」と結びついた「災害観」が存在するという事実が明らかになり、さらにそれが、「災害対策有効感」、「運命観」などとも連動するという実態が明らかになったのである。

もともと、日本的な災害観の存在を日本文化論や日本の思想に関する論文中で明瞭なかたちで指摘したのは、特に、関東大震災と関連させながら、「天譴」という言葉を使用して災害観の存在を論じたのは、清水幾太郎が嚆矢であった。ただ、清水の試みは、天譴論の存在を指摘した点は重要であったが、幾つかの点で問題が残っているものであった。

一つは、なぜ、近代日本にこのような災害観が残っているのかという点であり、それは関東大震災という事象のみに特有な現象なのかということである。また、清水は、天譴論が天恵論にも通じるものであり、また、日本的な自然観とも関連するものであることを語ってはいるが、これが日本人の価値意識全般とどう関わるかについては述べていないのである[2]。

筆者は当時から日本的な価値観の問題に関心を持ち、小林秀雄の「日本的人生観[3]」の議論、家

1　欧米には、日本的な天譴論のようなものがないかというと必ずしもそうではなく、かつて西洋にも同じような考えかたはあったようである。実際、リスボン大地震（1755）の時には、天譴論のようなものが生まれた。ただ、それはいわば前近代的な思考の最後の段階で現れたものであり、関東大震災の事例とは状況が違っている。

2　ただ、清水は、災害観が潜在的に持つ両義性については興味深い見解を示している。清水は関東大震災直後の世論の中に、災害を天譴とみなす「天譴論」が現れていることに注目したのだが、この一見、悲観主義・否定的なものの見方の中に肯定的なものへの指向性が同時に潜んでいることを指摘した。「天譴の観念が持ち出されることによって、天災は無意味な自然現象であることをやめ、人間にとって有意味な、しかも積極的な方向に有意味な事実となる。」（清水1970：154）。

3　小林はこう言っている。〜知覚は認識を構成する一定の要素でもないし、あたかも写真でも撮るというように外物が知覚でとらえられるものでもない。私たちが生きるために、外物にたいしてどういう動作をとるかに応じて知覚は現れるのである（小林 1954：128）。人生観もそのようなものだと言うのである。

永三郎の無常観や自然観、日本的否定論の系譜の議論[4]、鈴木大拙の日本文化論、フッサールの生活世界論（科学的合理性だけにとらわれないものの見方）、またエーリッヒ・フロムの論考の「人間学」や「存在論」に関わる部分[5]に関心を持っていたが、こうした論者に関する考察を経て、特に、フロムの人間の価値観はその存在のありかたに関する構えを反映しているという指摘にヒントを得て、「天譴論」や「日本的災害観」を日本的な価値観の全体的構造、日本人の「内面」の問題に結びつけて考えようと思い立ったのである。それが1981年の日本人の災害観調査[6]につながっている。

この研究は1981年という物質文明全肯定とでも言える時代の日本の中で、伝統的で存在論的な災害観が人々の意識の中に存在し、また、それが自然観や運命観、無常観、防災有効意識などとも関連する形で存在するということを明らかにした点で、日本の災害研究、日本文化研究の一つの方向性を開いたのではないかと自負しているが[7]、一つの問題点は、こうした価値観、ものの見方相互の関連性の背景にあるものが当時はよく読み取れなかった点である。その後、日本的内面の構成の背後にあるものの解明はともかく、この日本的災害観の研究は、「世間・運命観」研究というかたちで継続され、首都圏やその他の地域での調査などでも基本的知見の妥当性は繰り返し確認されてきたのである。

こうした一連の研究の次の段階は、「世間・運命観」（「天譴論」など日本的災害観も含む）が、政治関心や地域活性化の意識と関連しているという知見の発見だったのだが、これは三上俊治東洋大学教授らとの環境問題研究の中で明らかになったものである。筆者は、環境問題への意識を日本的価値観との関連で分析する作業を担当したのだが、この研究の中で、個人的なパーソナリティなどは環境意識とは関連しないが、「運命観」や「利他主義」、「利己主義批判」、「物質的な快楽主義批判（清貧の思想）」、「科学万能論批判」等（つまり、筆者の言う「世間・運命観」）とは関連していることが明らかになったのである。さらに、その後の研究で「世間・運命観」は環境問題への意識だけでなく、政治関心度や地域活性化の問題への関心度や原発問題への関心度とも関連し、ロボット倫理や情報倫理（プライバシー観など）とも関連性を持つことがわかってきたのである。

「世間・運命観」は存在論、「内面的」なものでありながら、同時に政治や環境問題、技術の

4　家永三郎『日本思想史に於ける否定の論理の発達』（1969年）（オリジナル版は1935年）、新泉社。戦後間もない時期の著書の中で家永は、日本的自然の精神性・宗教性について語っている（家永1947：16）。

5　フロムは以下のように言う。～人間は自然のきまぐれとして生まれ、自然の一部でありながら、自然を超越している。人間は行動と決定の源泉を見い出して、それを本能の原理と取り替えなければならない。人間はある方向づけの枠組みをもつことによって、首尾一貫した行動の原理としての首尾一貫した世界像をつくりあげなければならない（『希望の革命』邦訳、102頁）。だから人間は世界像を必要とするのだと言うのである。

6　この調査の調査対象者は、岩手県大船渡市在住の20～69歳の男女800名であり、調査期間は、昭和56年９月19日～24日であった。また、調査方法は個別面接法で、回収率は800票中628票（78.5%）であった。調査費用は東京大学新聞研究所（当時）の所内研究費の配分を受けた。

7　ただ、当時の日本の災害研究は、全体としてはシブタニ等のアメリカ社会心理学的災害研究＝集合行動論の強い影響下にあった。このような傾向は阪神淡路大震災を契機に一変するが、その後は、「心の傷」等を重視する心理学的アプローチが一つのトレンドとなった。

価値観的問題など、「外」の問題にもつながっていくものであるということだが[8]、最近の筆者の研究で、「もののあわれ」的なものの見方に関しても同様な事実がある（「内」と「外」の連関）ということがわかってきた。つまり、「もののあわれ」的ものの見方は、「世間・運命観」同様、ロボット倫理やプライバシー観、積極的な政治関心度などと関連性を示すのである。

このような「もののあわれ」や「世間・運命観」の研究は、「外」の研究、例えば、ロボットと人間の関係に関する研究を「内在的」な視点から捉えなおす上でもきわめて有効なものである。筆者は、近年、情報倫理の研究の延長として、ロボット倫理の研究にも参加することが多いのだが、「ロボットは主体性を持つか、ロボットは責任を持つのか」という欧米の研究者たちの間での議論はよくわからないままである。ロボットは機械なのであるから、ロボットは責任を持つわけはないではないかというのが筆者の率直な意見である。逆に、欧米の研究者やジャーナリストは、日本人が何の疑問も持たないまま、人間型ロボットを人間の生活の場に登場させ、人間と交流させようとしているのがわからないということを頻りに言う。

欧米とは別な形でのロボットと人間の関係が日本にあり、それが日本的な価値観と連動するのではないかという考えがここから出てくるが、現に一部の研究者はたとえば、アニミズムという視点から日本人とロボットとの関係を考えようとしている（たとえば、Kitano 2006）。アニミズムとは一見ひどく前近代的で非合理的考えのように思えるが、われわれの心や感覚がわれわれの身体の外にも広がっているという点では、われわれは一様にアニミズムの世界にいる。幻影肢痛が、鏡や外部スクリーンに映った映像としての自己の身体の動きを見るだけで軽減したり、ラバーハンド錯視でゴムの手が自分の手のように感じる現象は、痛み、感覚、身体所有感などが自己の身体の外に広がっているということを意味している。Oberman et al.（2007）の研究では、ロボットアームの運動を見ている時でも、人間の手の運動を見ている時と同様、ミラーニューロンに関わる脳の部分が反応することがわかっている。脳の反応に関してはロボットの手でも人間の世界の側にあると判断されているということである。

その意味では日本のアニミズムは新たな研究方向を生み出すかもしれないのである。実際、筆者自身、日本人のロボット観が、「もののあわれ」的ものの見方と（さらには「世間・運命観」の項目と）関連性をもつことを自身の研究ですでに明らかにしている。ここにあるのは、因果関係や論理的な意味関係に基づく関係だけに限定されない、それとは別の意味の連関や論理に基づく論理や判断の形である。

III．もののあわれ、「世間・運命観」の背後にあるもの

ここでは、過去に筆者が論じた問題や取り上げたデータの再分析も含めて、日本的価値観・ものの見方の「内的」構造および「内－外」連関性（「内的意識」が「外」のロボット倫理、情報倫理などと関連しているという連関）について論じてみたい。この点については、拙稿（2017）

8　このような「世間・運命観」的なものが政治意識や環境問題への関心、ロボット倫理やプライバシー観と関連していることを明らかにした研究は、筆者のものをのぞいては他にはほとんど見当たらない。

で示したように、すでにかなりはっきりとした形で仮説が浮かび上がってきている。すなわち、「運命観」などの「世間・運命観」は、「直接的経験」をどこか離れたところから眺めているかのような鳥瞰図的場、観察の場に位置しているのではないかという仮説である。

これは、調査対象者の災害経験などの質問（被災時に印象に残ったことは何か？）に関する項目をいくつか選びだし、主成分分析にかけ、プロット図を描き、そこに現れている意味を確認するという作業を通じて検証される（何度か選択的に分析項目を選び出し、プロット図を描き、その変化を見るという作業を続ける）。2011G被災地調査（2011年に福島、宮城、岩手の25～44歳の住民を対象に実施した調査：年齢、地域、性別の割り当て法で実施）では、「なじみのお店が災害でなくなってしまったこと」、「津波の恐怖」、「地震時の揺れの恐怖」、「余震の不安」、「自衛隊・警察・消防などの活躍」、「外国人の避難」の６項目を主成分分析にかけその結果をプロット図にした（バリマックス回転）。この図は二つの次元からなる平面図になるが、図の中でこの６項目はある場所に集中して固まる（図１参照）。

この６つの災害時の直接経験をあらわす項目に、「災害を通して平凡な生活の大切さを知った」という項目（に対する共感度）を加え、さらにプロット化すると、図１が得られる（プロット図の中で被災時の経験を表す項目は一か所に固まっているが、これ自体は「災害を通して・・・」という項目を加える前後で変化しない）。この「災害を通して平凡な生活の大切さを知った」という項目は、明らかに直接的な体験を鳥瞰図的に眺めているかのような場に位置している。しかも、直観的に判断しても、「災害を通して・・・」という項目・意識は、直接的な災害経験に対して、それを少し離れたところから観察しているかのような印象を与える意識である。つまり、被災地域住民の意識において、潜在的には「直接的な経験」と「直接的な経験を観察する意識」との二重の構造ができているということが言えるのである。これは、「内的なもの」と「外的なもの」の二重性と言って良いであろう。実際、日常の経験を振り返ってみても、われわれは災害経験に限らず、このような「複合的」経験をしばしば経験しているように思えるのである。この後の話を先取りして言えば、こうした経験を織り込んで成立しているのが日本の文化的な体験ではないか。あるいは、文化的な経験がこのような二重の経験―観察の意識に反映されているとも言える。

今回の分析は、「もののあわれ」的ものの見方の意味構造、日本的「内面」の構造の解析を一つの中心的課題として設定しているのだが、この点に関しても、このプロット図を応用することで、重要なヒントを得ることができる。2014G調査（2014年に福島、宮城、岩手の25～44歳の住民を対象に実施した調査：2011Gと同様、年齢、地域、性別の割り当て法で実施）のデータを使って「もののあわれ」への共感度をプロットしてみた。この図において「もののあわれ」は見事に図１の場合の「災害を通して平凡な生活の大切さを知った」という意識が占める場とほぼ同じところに位置付けられている。

興味深いことに、このプロット図上の「もののあわれ」の位置には「ロボット倫理」（の項目のいくつか）も位置する。図のプロット上では「もののあわれ」と「ロボット倫理」と「災害経験に関する鳥瞰図的ものの見方」は同じ場所に位置するのである。つまり、こうしたものの見方

は、「直接的な体験」に対してそこから一歩引いた視点でその体験そのものを眺めるような観察の視点に立つということで共通性をもつということである。さらに、拙稿(2017)でも述べたが、この「観察の位置」には、「運命論」など、「世間・運命論」に関わる項目も位置する。今回、こうした分析に加えて他の項目についても可能な範囲で調べたが、それをまとめたものが次の表１である。これはいわば、「鳥瞰図的位置」に立つことが確認された項目の一覧表である。

整理するとここまでの議論、知見の内容を次のようにまとめることができる。～ここで取り上げたプロット図で見る限り、われわれの経験は二重の経験の契機で成り立っているということが言える。一つは「直接的経験」で、もう一つが「この経験を観察する視点（に関わるreflective自己省察的な意識)」である[9]。この二重の意識のうち、「reflection的な意識」をとりあえず「観照的自己（観察）意識[10]」と呼ぶことにする。

このように上記の二重意識の自己観察的なもののありかたを「観照的」と呼ぶことにすれば、「もののあわれ」はこの「観照的自己（観察）意識」の一部であるということになる。「もののあわれ」と「運命観」とは意識の内容自体は違うものの、自己観察的な能力の発揮という面では同じものであるという説明が成り立つ。心理学で言う尺度的なものがここにあると言えなくもないが、心理学的尺度が通常、「意味内容」のレベルでも同じような内容の意識・項目のセットで形成されるのに対し、この「観照的自己（観察）意識」はいわば、フロムの言う「態度」のようなものである。かつてアドルノらの「権威主義的人格　authoritarian personality」(Adorno et al. 1950）という性格特性が注目されたことがあったが（フロムもこの研究に関わっている)、あれは通常の心理学的尺度の場合とは異なり、「世界に向かう姿勢＝態度＝構え」のようなものであった。「観照的自己（観察）意識」も同様に、世界に向き合う姿勢に関係しているように思える。

今回の分析ではさらに、「もののあわれ」や「世間・運命観」が共通の「構え」の姿勢をもつという考えを前提に、こうしたものの見方が一つの包括的なものの見方にまとまる可能性についても考えてみた。具体的には、因子分析と信頼性係数の計算を通じて、世界に対する態度を連想させるような「包括的意味図式」の発見に努めた。

具体的には、表１のリストの中から、過去の調査の予備的な分析の結果などを基に、「人間には何らかのかたちで運命というものがある」、「夏の花火やホタルなどははかないから美しいのだと思ったりすることがある」、「生命をもたない地球、大地、山や川であってもそれを慈しむのは人間的な感情として当然のことだ」、「針供養という儀式があるように、使われなくなったロボットやコンピュータはもっと供養されてもいい」、「災害などで自分を犠牲にして他人を助けた人の話しを聞くと自分も人生を大切にしたいと思ったりする」、「プライバシーについてあまりにも神経質になると、友人同士でも本音でものごとが語れなくなる恐れがある」の各項目を選び出し、

9　直接的経験自体も経験者の意識であり、それを観察する意識もその経験者の意識である。それぞれが経験のレベルと観察のレベルでself-reflection 的に相手を映し出すのである。これは西田的な「知るものと知られるものが同じ」という状況を連想させる（Feenberg 1994)。(Feenberg が参照しているのは西田の『善の研究』)。

10　「観照」には「自己を無私の精神で観察する」あるいは「reflection」するという意味がある。「再帰的観照意識」という言い方も可能だろうが、その場合の「再帰的」という表現にも、観察されるものと観察するものとの関係が再帰的・循環的であるという意味が込められている。

これを因子分析（主因子法、バリマックス回転）にかけてみた（データは2014G調査）。その結果、一因子を得たので、さらにこれらの項目を信頼性分析にかけてみた。すると驚くべきことに、.737というα係数を得たのである。表面的には相互にほとんど意味の共通性がない項目の集合に関する信頼性係数としては驚くような数字である。これはこの６つの項目が一つの尺度としても通用するような内的な一貫性をもっていることを示している。

このようにして得られた因子を「観照的自己（観察）意識」因子と命名した上で、この因子とさまざまな項目との間の相関係数を計算してみた（データは2014G調査）。その結果得られたのが、表２である。ここには驚くべき数字が示されている。表を見ればわかるように、「観照的自己（観察）意識」因子はさまざまな項目（政治関心、環境問題関心、ロボット倫理、プライバシー等々）との間で強い連関性を持つことが示されているのである。ここに示された相関係数はどれも通常の社会調査では得られないような高い数字のものばかりである。「観照的自己(観察)意識」とこれらの諸項目間には論理的には関連性が見いだせないものが多いが、逆に言えば、「観照的視点」とこのような日常的意識・社会問題に関する意識との間には、表層的な意味意識を越えた連関性が存在するということになる。

このような視点は、人生や社会の問題をその具体的な内容は違っていても、ある一定の視点から捉えることを可能にする。これはまさに人生に対する構えであり、ここには西田が言うような「無の場所」があるとも言える。つまり、「もののあわれ」や「針供養」の具体的意味内容が問題なのではなく、人生を観照的に眺める契機がここにもあり、そこにもあるということが重要なのである。これこそ日本的な「内面」、日本的人生「観」と呼べるようなものではないか。この視点は、「アレキシサイミア」的項目をめぐる意味連関の弱さという点と比較するとさらにいろいろな意味を持ちうるものである。

表１.「観照的自己（観察）意識」と「直接的経験」に関する意識

経験を観察する場所（「観照的自己（観察）意識」の位置する場所）に位置することが確認されたものの見方・意見	直接的経験の内容
「人間には何らかのかたちで運命というものがある」、「生命をもたない地球、大地、山や川であってもそれを慈しむのは人間的な感情として当然のことだ。」、「夏の花火やホタルなどははかないから美しいのだと思ったりすることがある。」、「災害などで自分を犠牲にして他人を助けた人の話しを聞くと自分も人生を大切にしたいと思ったりする」、「針供養という儀式があるように、使われなくなったロボットやコンピュータはもっと供養されてもいい」、「プライバシーについてあまりにも神経質になると、友人同士でも本音でものごとが語れなくなる恐れがある」、「災害を通して平凡な生活の大切さを知った」、「あまり会社や同僚に迷惑がかからないなら、職場の備品（ノートや筆記用具など）を自宅に持ち帰って私的に使うのは、それほど悪い行為ではない」（これは「経験」に関わる項目でないことに注意すべき。つまり、自分がそういうことをしているかどうかではなく、こうした行為が許与されることなのかどうか常に自分で判断しようとしているということである）	災害時の印象に残った出来事（「なじみのお店が災害でなくなってしまったこと」、「津波の恐怖」、「地震時の揺れの恐怖」、「余震の不安」、「自衛隊・警察・消防などの活躍」、「外国人の避難」）

図１.「直接的経験」プラス「観照」（災害経験の人生論的意味）（2011Gと2014G）

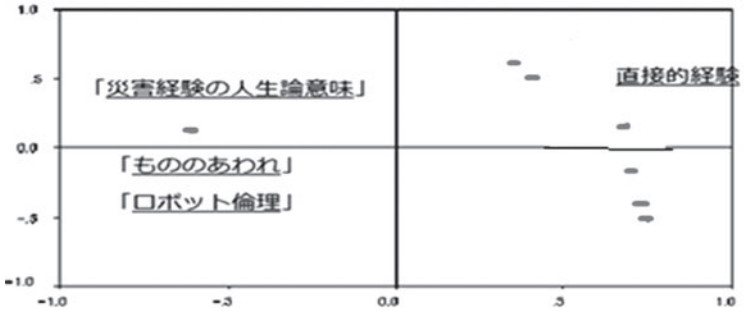

表２.「観照的自己（観察）意識」・「アレキシサイミア」とさまざまな項目の相関（2014G）

	「アレキシサイミア（想像的共感欠如）」因子	「観照的自己（観察）意識」因子
鉄腕アトムの最後のエピソードが地球を救うためのアトムの自己犠牲だったと知ると感動する。	.101**	.553**
映画やドラマの内容に感動した時、映画やドラマの中に出てきたロケ地や撮影現場に行ってみたくなる。	-	.326**
生命をもたないロボットでも、作った人の心がこもっていることを考えると、むやみに壊したりすることには抵抗感がある。	-	.574**
自然災害などで住んでいる家が壊されたりすると、自分の大事な一部がなくなったような気になり、悲しくなる。	-	.623**
自動化されたロボット兵士を使って戦争で相手の人間を殺傷する計画があることを聞くと、なにかやりきれなさを感じる。	ns	.537**
小さな子供を一人で家におくよりは、監視機能などをそなえた自動化されたロボットに世話をさせる方がましだ。	.085*	.278**
学習効果をあげるために、ロボットを学校で子供の教育用に使うのは、良いことだ。	.098**	.361**
犯罪が起きた時、犯罪の意味を知るために、容疑者や犯人の家庭環境、職業などをやはりある程度知りたいと思う。	ns	.426**
自慢話をするよりも、自分の病気やちょっとした失敗談などを話題にすると、友人や知人との距離感がぐっと縮まることがある。	.095*	.538**
大きな自然災害の発生は、人間に対する天からのある種の警告である。	.113**	.433**
国内政治問題への関心度	.093*	.360**
地球環境問題への関心度	.137**	.429**
公的な年金制度が行き詰まり、将来の生活にめどが立たなくなること。	ns	.426**
自分自身が病気になったり、不慮の事故にあったりすること。	ns	.441**
家族や大切な人が病気になったり、危険な目にあったりすること。	ns	.470**
原発被害が広がり子供たちや若い世代の健康が脅かされること。	ns	.406**

１）**=p<0.01, *=p<0.05（両側）。上記表の数字は相関係数。（nsは有意な相関なし。）

「観照的視点」の項目群と対照的なのが、「アレキシサイミア　alexithymia」（「失感情症」）に関連する項目をめぐる項目間の繋がりの弱さである。（「失感情・失空想能力」という方が適切かもしれない）。これは感情の働きかたや空想能力の弱さに関わる心的な状態のことで、自己自身のことや他者、外の世界の出来事を知る場面で、感情や想像の力の弱さのために問題が生じるような事態を指している。これまでの本稿の記述の内容を受けて言えば、このことは、自己の内的世界や現象の内的アスペクトを知る能力の存在を暗示している。この内的なものは自己や世界に関して、self-reflection、reflectiveなレベルでの認識に関わるものであると考えられる。

今回、「空想にふけることはほとんどない」、「「顔かたち」がもっと良ければよいのにと、気に病むことはない」、「病気になったらどうしようと気をやむことがあまりない」の３項目を利用して因子にまとまるか計算した（主因子法）ところ一因子を得た（2014G調査データ利用）。この３つの項目を信頼性検定にかけたところ、α＝.666という数値を得た。尺度を構成するには若干低い数字だが、項目間の内的な連関はある程度確認できた。この因子を「アレキシサイミア（想像的共感欠如）」因子と名付け、「観照的自己（観察）意識」因子の場合と同じように、さまざまな項目との間で相関係数を計算したところ、表２のような結果を得た。これは、「アレキシサイミア」因子が「観照」的因子と比較すると、他の項目との間でかなり限定的な連関しかもっていないということを意味している。特に印象的なのがリスク観との関連で、「アレキシサイミア」的状況ではリスクの問題も見えにくいのではないかと考えさせられる。

「観照」的視点・態度は「無の場所」の論理に近いといったが、これについては少し追加で説明する。「直接的経験」に関する項目と「観照的視点」との間では、論理的つながりはないのだが、しかし、にもかかわらずこれらの項目間にはある意味で強い関連性あるいは対応性がある。ここには、通常の論理、「主語的論理」と違う論理が働いているとも言える。‘Occurrence of disaster is a warning from heaven.’という言葉で表されるのが、「天譴論」であるが、このＡ is Ｂという文で、Ａは主語ではない、ＡとＢの関係も論理的な因果関係、包摂関係を示すものではないのではないと考えることもできる。つまり「述語の論理」として考えるということである。これは三上章の「日本語の＜は＞は主語を表す＜は＞ではない、話題を提供する＜は＞だ」という議論に通じるものである（三上 1960）。「観照的視点」がこのような「論理」を背景として働くのなら、ここにあるのはある種の「日本的論理」、「述語の論理」とでも言えるようなものである。三上は「は」は一つの文を越えて広がっていくというが、それを見届けているのが「観照」という想像力を含むものの見方なのかもしれない。

Ⅳ．2016G調査の結果

引き続き、2016年に福島、宮城、岩手の被災３県で実施した調査の内容を紹介する。（2016年12月22日～12月27日実施。福島、宮城、岩手の被災３県に住む25～44歳の男女600名が対象。県人口、年齢、性別ごとの年齢比に関する統計資料をもとに調査対象者を割り当てた）。この調査の分析結果については、本稿のテーマや紙幅のことを考え、「観照」的視点に類するような「包

括的ものの見方」に関する分析の結果を中心に概要を紹介することにする。

最初の分析段階で、2014G調査と同様に「観照的な視点」因子的なものが得られるか、因子分析を繰り返し、プロット図をあれこれと描いてみたのだが、2014Gの場合と同じ項目を使った場合は、「観照的な視点」因子は得られなかった（2014年と2016年の２年間で被災地地域住民の意識に変化があったのかもしれない）。そこでさらに試行錯誤を繰り返し、項目間の相関係数に関する計算をあれこれと試みてみたところ、「地域社会での生き方に関するものの見方[11]」がある意味での「観照的視点」の役割と同じような働き方をしているのではないかということに気付いた。この「地域社会での生き方に関するものの見方」と2014Gの時の「観照的自己（観察）意識」因子の一部を集めて因子分析にかけたところ、一因子を得た。さらにこれを信頼数係数計算にかけたところ、α＝.861という高い数値を得た。

この因子をとりあえず「観照・共生指向複合意識」因子と命名し、この「観照・共生指向複合」因子とさまざまな他の項目との相関係数を計算したところ、表３に示すような結果が得られた。ここにあるのは、2014Gの「観照的視点」因子が示したような包括的な意味連関性である。2014Gの調査で得られた「観照的自己（観察）意識」はいわば人生全体をある一つの視点から眺めるような印象を与えるものであったが、「観照・共生指向複合」的意識も基本的にはそれと似たような特性をもつものである。これもやはり人生を観照する視点であるように思える。

いずれにせよ、大事な点はこのような人生を観照するような視点、地域社会の生活を人生に何が大切かという視点で捉えようとする視線、こういった視線に関係する意識が日本社会では大きな役割を果たしているという点である。日本的「内面」は倫理的、人生論、存在論的な生き方への指向性を色濃く含んだ性質のものであるということが、日本で行われた３つの調査（2011G、2014G、2016G）の分析の結果、どうやら言えそうなのである。

表３.「観照・共生指向複合意識」因子とさまざまな項目の相関（結果の一部）（2016G 日本）

「観照・共生指向複合意識」因子と関連する項目	
鉄腕アトムの最後のエピソードが地球を救うためのアトムの自己犠牲だったと知ると感動する。	.519**
ロボットに介護をまかせることは便利なようだが、同時に介護される人の社会的孤立を強めるので問題がある。	.428**
人工知能による自動車自動運転ロボットは便利なようだが、機械に生き死にに関する判断をまかせることを考えると、安易な利用には問題がある。	.429**
大きな自然災害の発生は、人間に対する天からのある種の警告である。	.338**
国内政治問題への関心度	.500**
地球環境問題への関心度	.505**
地域社会のつながりは生きていくうえで大切で重要だと思う。	.731**

11 「もし地域で災害が発生した時、近くに老人などがいたら、（自分はそういう人たちの）避難の手助けをしたいと思う」、「自分の住んでいる地域で災害が発生したら、一人暮らしの老人などは避難に困るだろうと（自分は）日頃心配している」等の項目・意識。

あまり会社や同僚に迷惑がかからないなら、職場の備品（ノートや筆記用具など）を自宅に持ち帰って私的に使うのは、それほど悪い行為ではない。	.087*
金もうけだけを考えていて、従業員にとって人間成長の場でありえないような企業は、長い目で見れば、社会的評価を落とすであろう。	.511**

１）**=p<0.01, *=p<0.05（両側）。上記表の数字は相関係数。

Ⅴ．ベトナムにおける「もののあわれ」と「風土論」的つながり意識

日本の三つの調査のデータの分析から得た重要な知見を再度整理しよう。それは以下のようにまとめられる。１）日本人は物事に共感したり、直接的な経験をしていると同時に、それをどこか離れた所から観照するような目をもっている。「もののあわれ」も含め、これが日本的内面の構造となっている。２）日本人はさまざまな物事を「人生とか何か」という視点で眺め、こうした視点を持ちつつ日常生活の中で物事に関わっている。３）ロボットや人工知能など技術的側面が強いと思われる事象・出来事も人生の中の一つの事象・出来事として眺められている。以上のように整理されると思うが、ベトナムではどうだろう。2017年に実施した調査＝2017Vベトナム調査[12]のデータの分析を以下で紹介したい。ここでも本稿のテーマに関わる部分を概要として紹介する。（今回の分析は、『地域研究』前号で紹介した筆者の研究＝「世間・運命観」を日本と中国・韓国の調査データを比較しながら分析する＝の継続という意味ももつ。）

ベトナムの調査データの分析に際してはまず日本のデータとの比較という意味で、「観照的視点」がベトナムでも存在するかその点を調べてみた[13]。日本の事例を参考にして、「もののあわれ」と「人間には何らかのかたちで運命というものがある」、「生命をもたない地球、大地、山や川が慈しみの対象になるように、ロボットも将来慈しみの対象になるだろう」、「プライバシーについてあまりにも神経質になると、友人同士でも本音でものごとが語れなくなる恐れがある」の計５項目を使って因子分析をすると一因子を得るが、この５項目の信頼性係数はα＝.461にしかならない。この５項目のうちの４項目を使い（「運命論」を外す）（信頼性係数の数値を見て項目を選んだ）、因子分析をすると当然一因子を得るが、この場合の信頼性係数はα＝.509となり若干α値が上がる。そこでこの因子を「観照・もののあわれ」因子と名付け、他の項目との相関関係を見ることにした。その結果が表４の数字である。

12　ハノイ、ホーチミンに住む25～44歳の男女300人が対象。年齢、男女別の人口の統計資料に基づき、割り当て法で実施した。実施期間、2017年６月15日～６月12日。調査実施は、クロス・マーケッティング社に依頼。調査票は日本語からベトナム語に翻訳したものを使用。

13　単純集計で見てみると、「もののあわれ」的ものの見方に対する共感度はベトナムでは予想以上に高かった。「夏の花火やホタルなどははかないから美しいのだと思ったりすることがある」という意見に賛成する人の割合（「そう思う」と「まあそう思う」の合計）は69.3%という数字になる。

表４.「観照的・もののあわれ」因子他３因子とさまざまな項目の相関（部分）（2017V ベトナム）

	「現代文明批判」	「観照プラス伝統的人間観」因子	「伝統的人間関係観」因子	「観照的・もののあわれ」因子
映画やドラマの内容に感動した時、映画やドラマの中に出てきたロケ地や撮影現場に行ってみたくなる。	.318**	.411**	.306**	.473**
競争や効率ばかりを重視する欧米型の企業の姿勢に追随するベトナムの企業の姿勢は間違っている。	.379**	.603**	.554**	.481**
企業というのはそこで働く人が能力を磨き、人間として成長できる場所であるべきだ。	283**	ns	ns	.188**
人間は豊かになりすぎると堕落しがちなものだ	-	.271**	.189**	.328**
大きな自然災害の発生は、人間に対する天からのある種の警告である	-	ns	ns	ns
ロボットに介護をまかせることは便利なようだが、同時に介護される人の社会的孤立を強めるので問題がある。	.326**	.296**	.247**	.280**
タマゴッチのような仮想生命体にも子供が同情や慈しみの心を感じるのは自然なことだ。（タマゴッチ：卵の形をしているゲーム機で、仮想のペットを育てるシミュレーション・ゲーム）	.136*	.458**	.407**	.400**
インターネットのＳＮＳやブログで自分の顔写真を公開するのはプライバシーの面で問題である。	.373**	.467**	.389**	.437**
自分の病気やちょっとした失敗談などを話題にすると、友人や知人との距離感がぐっと縮まることがある	.409**	.620**	.545**	.542**

１）**=p<0.01, *=p<0.05（両側）。上記表の数字は相関係数。

また、過去の中国や韓国での調査の分析では、「就職で知りあいに便宜をはかる」、「会社の備品を私的に使う」など、「情実」を含んだ伝統的な人間関係がいろいろな場面で人々の意識や価値観に影響を与えていることがわかったので、ベトナムでもこの点を調べてみた。「就職の斡旋をする時は、会社に役立つ人よりも、事情が許せば、親しい友人の就職を優先したいと思うのが人情のある普通の考え方だ」、「あまり会社や同僚に迷惑がかからないなら、職場の備品（ノートや筆記用具など）を自宅に持ち帰って私的に使うのは、それほど悪い行為ではない」等の「情実」、伝統的・血縁知人優先的な人間関係観に関する４項目を選びこれを因子分析にかけると一因子になる（α係数は.666）。この因子を「伝統的人間関係観」因子と呼び、さまざまな項目・意識との相関係数を計算した。その結果は、表４に載せてある。この「伝統的人間観因子」も一つの包括的な価値観としてベトナム人にとっては大きな意味をもつように思える。

こうした分析に加えて、より包括的な「ものの見方」因子的なものの存在をつかむために、日本のデータの分析と同じように、項目を何度も入れ替えながら因子分析を行い（日本の結果を参照した）、プロット図を描き、日本的観照視座に関わるような因子が見つかるかあれこれと試みた。このやりかたではうまくいかなかったが、すでに得られている「観照的・もののあわれ」因

子と「伝統的人間関係観因子」とを合わせて計算すると、因子分析では一因子となった。また、項目間の信頼性係数を計算すると、α=.736というかなり高い数字を得た。人生や人生に関わる出来事をどこか一歩離れたところから眺めているような意識・ものの見方の集まりである「観照的・もののあわれ」因子と「情実」や「知人の便宜優先」などを含む「伝統的人間関係観」因子が一つに融合して一因子を形成するというのは、日本的に考えれば理解できないが、しかし、ベトナムでは、これが一つの融合した価値観・ものの意識の集合のようなものを作っているということである。こうして得られた因子を「観照プラス伝統的人間観」因子と名付け、さまざまな項目・意識との関連性を見てみた。その結果が表４に示してある。

この３つの因子に加えて、表４には「現代文明批判」因子とさまざまな項目・要因との相関係数も示してある。これは「人間は豊かになりすぎると堕落しがちなものだ」「人間には何らかのかたちで運命というものがある」、「今のベトナムには自己中心的な人間が多すぎる」、「今の世の中が明るく楽しそうに見えるのは表面的な部分だけである」という「世間・運命観」を構成する項目のうちの４つを選んで組み合わせた因子であるが、これも表４に見るように、さまざまな項目・意識との間でかなり強い関連性を有している。

Ⅵ．台湾学生調査

日本でもベトナムでも「包括的な人生の見方」というものがあることがわかったのだが、この結果を受けて、過去のアジアでの調査を一部再分析することにし、2014年に実施した台湾学生調査（2014TWS調査：2014年７月に台湾政治大学181名の学生を対象におこなった調査）のデータを改めて分析することにした（調査対象者が少ないし、学生調査であるということで、その点留意が必要）。分析のポイントは、ベトナムのような「伝統的人間関係観」意識のようなものがあるかということだが、これは分析の結果見つけることができなかった。ベトナムでは一つの因子にまとまった「伝統的人間関係観」意識は台湾では一つの因子にまとまらない。また、得られた２つの因子を構成する項目群の信頼性係数も低い。

ここから出される結論（暫定的なものだが）は、ベトナムでは、贈り物や便宜のやりとり、肉親の相互扶助などといった人間関係のありかたに関する意識は一つの統合的な価値観になっているのに、台湾ではそうではないということである。これは「情実」、「公私混同」、「便宜のやり取り」などが統一された価値観を形成していないということ、つまり、これらはものの見方を大きく左右するようなものになっていないということである。この結果が何を意味するのか、たとえば、台湾の人間関係観がベトナムより「進んでいる」のかは、現時点では判断を保留したい。

台湾で一つの統合的人生観に近い働きをしているものは、「伝統的人間関係観」ではなく、日本人がもっている統合的人生観に近いものである。日本の場合、これを筆者の過去の論文等では暫定的に「世間・運命観」と呼んでいるが、台湾の学生もこれに近いものをもっているように思える。（具体的な分析の結果はここでは省略する。）

なお、以下の表５は、「世間・運命観」の各項目に日本やアジアの人がどう反応したかをまと

めたものである。「世間・運命観」を構成する項目群の具体的な内容もこれでわかるようにしてある。

表５．「世間・運命観」への共感（一部のみ示す）（日本と東アジア・東南アジア）

	1995G 日本	2000G 日本	2011HG 日本	2010CG 中国	2012TS タイ	2014HG 日本	2015CG 中国	2016KG 韓国	2014TWS 台湾	2017V ベトナム
現代生活の中で人間はあまりにも自然からはなれ過ぎてしまっている	73.6%	–	78.0	90.6	91.5	71.2	82.0	86.0	91.1	91.0
人間は豊かになりすぎると堕落しがちなものだ	83.7	81.5	87.0	86.2	65.2	80.4	76.3	67.3	85.1	87.0
人間には何らかのかたちで運命というものがある	84.4	79.0	82.4	81.5	52.9	77.5	76.3	80.4	81.8	82.3
世の中には科学で説明できないことも数多くある	88.5	88.3	88.2	94.2	89.4	81.8	89.3	91.0	97.8	96.4
今の日本(中国、韓国、台湾、タイ、ベトナム)には自己中心的な人間が多すぎる	85.5	88.3	80.3	93.8	–	76.8	91.6	91.0	86.7	89.0
今の世の中では一人一人の人間はあまりにも無力である	71.9	64.8	77.8	–	–	72.7	–	–	61.9	–
今の世の中が明るく楽しそうに見えるのは表面的な部分だけである	73.3	65.6	72.7	83.8	–	70.0	77.6	83.0	58.0	86.4
人のためにつくせばいつかは自分にプラスとなってかえってくるものだ	–	68.1	74.3	83.4	95.1	66.5	78.0	79.7	77.9	94.6
最近災害が多いのは人間に対する天からのある種の警告である	–	–	60.2	81.7	19.7	59.0	80.0	75.3	64.1	92.7

１）上の表の数字は、「共感できる（このような意見や考えに）」と「ある程度共感できる」の合計値。

（この表で紹介した調査の説明。1995Ｇは1995年に東京で実施（20歳以上、587人）。2000Gは2000年に首都圏で実施（20歳以上、611人）。以上の初期調査の詳しい内容については以下の文献を参照。Nakada（2006a, 2006b）。より近年の調査の概要は以下のとおり。「2011HG調査」：福島、宮城、岩手の被災地地域在住の25～44歳男女744人。調査実施時期は2011年８月19日～21日。2014HG調査：2011HGと同じ手法、同じ対象（福島、宮城、岩手被災３県の25～44歳男女600人）に対して2014年に実施。2010C調査：2010年８月に中国で北京、上海、広州在住25～44歳男女481人を対象に実施。2014TWS調査：2014年７月に台湾政治大学181名の学生を対象におこなった調査。2012TS調査：2012年１月にタイでチュラーロンコーン大学学生141人を対象に実施した調査。2015CG：2015年９月に中国で北京、上海、広州在住25～44歳男女300人を対象に実施。2016KG調査：2016年５月23日～５月31日の期間に韓国・ソウル・釜山両市在住のインターネット利用者男女300名（30～39歳）を対象に実施。）

Ⅶ.「観照的視点」の背後にある文化・歴史・共通のものの見方

残されたスペースで、以上論じてきた点、とくに日本的「観照の視点」の問題、「内」と「外」の二重性からなる日本的「内面」の問題について関連文献を参照しながら考えてみたい。ただし、許された紙幅が限られているので、問題のポイントだけを指摘するだけにとどめる。丸山真男（1964）は周知のごとく、「内」と「外」の不分離を日本の後進性、近代化の遅れの証しと見た。宗教戦争、宗教と権力の闘争を経てやがて西洋では「内」（宗教、宗教的内面、倫理）と「外」（権力、秩序）の間で妥協が成立し、「内」と「外」は相互不干渉の状況になった。しかし、日本はこれが不徹底であった。佐藤直樹（2001）（法学、世間学）も日本の「世間」が非近代的な贈与の互酬制度を色濃く反映していると語る（彼の理論は、阿部謹也やフーコーの議論を踏襲している）。西洋では中世から近代に向かう過程で、人と人との直接的な贈与関係の間に一神教的な神が介在するようになった。ここで問題になるのは、日本の場合、贈与・互酬はあくまでも人と人の関係であり、その関係は直接的で身内的な関係を基礎にする。普遍主義的な態度・価値、たとえば、知らないものにも及ぶ無償の愛、愛他主義は成立しないのである[14]。

これに対して、日置（1993）は日本はアジアの他の国と比較して多様なコンテクストが存在し、科学の発達に必要なコンテクスト・フリーという状況が成立している国だと言う[15]。日本の場合コンテクスト・フリーという状況は、個人主義とかアイデンティティとかとは反対の対極にあるもので、むしろ、去私、無私と呼ばれるものに関わる。去私とか無私という態度は、現在の自己や自己を取り巻く特定のコンテクストにとらわれず、これを解体して、複数のコンテクストとの関連においてこうしたコンテクストやあるいは自己を再構成することである。これは具体的に言えば、自己や文化・歴史的コンテクストに対し、エディタビリティ（編集可能性）という姿勢、態度で臨むことである。これは、「ある行為主体が自己の認識する世界の中で意味づけ、行為として結実するために、コンテクストを適宜改変する。複数のコンテクストを融合したり、解釈を変更したり、サブコンテクストに分解したり、コンテクストの意味づけを変え読み替えをしたりというような編集」のことである。

「編集可能」という概念は興味深いが、この用語は使わなくても、実質的にこの問題に関わる議論はさまざまな論者によって展開されている。柄谷の議論（2011）はこの点で、近代以前と近代化が進む時代のそれぞれの時期における日本の「書き換え（編集）」過程に言及しており興味深い。柄谷が言うのは、日本語のテキストは二つの過去の文化的遺産を引き継いでいるということであり、一つは辞が詞を包むという文体構造で、これにより古代にあっては中国、近代に

14　佐藤は以下のように言う。～個人は自己の内に基準をもつ存在である。他者と離れ、神や神の代理人の前で告解という形で自己の真実について語るという行為、これが個人の内面を作った（佐藤2001）。なお、佐藤直樹は法学および世間学が専門。

15　日置は言う。～コンテクストから逃れ、鳥瞰的な視座に立つことは近代科学の知的所産であり、コンテクストを相対化して、自己のコンテクストが絶対のものではなく、他者との相関において評価されなければならないとすることは、身分や属性のコンテクストの中に閉じ込められていた前近代の社会での知的な状況から大きく飛躍することを可能とした（日置 1992：392）。

あっては欧米諸国の思想や制度に完全に飲み込まれずにすんできた。詞に関しては何でも受け入れてよい。辞、「てにをは」は変わらないから。ここには「述語的同一性」があるということになる。これは西田（幾多郎）的に言えば、「無の場所」で、日本人の「アイデンティティ」（同一性）という問題に大きく関わる（柄谷2001：161-162）。他の遺産は明治期の言文一致運動であり、これは日本人の内面の近代化、近代西洋化に寄与した。

詞と辞の関係についての考察は、小林秀雄によれば、徳川期の国学の議論にまで遡る。小林秀雄（1979）によれば、本居宣長らの『源氏物語』や「もののあはれ」に関わる考察は、日本の「内面」を作るうえで大きな働きをした。しかし、本居宣長にとって、「もののあはれとは何か」が重要ではなく、それよりも「もののあはれを知るとは何か」が重要であった（これが小林の『本居宣長』の中での議論のキーポイントである）（小林1979：215）。つまり、「もののあはれ」とは、self-reflection的な面を最初から持つものであった（小林1979：268-269）。

ここから言えることは、日本的内面は歴史的に形成されてきたということだが、再度柄谷に戻れば、これはきわめて重要なポイントである。それは日本語では、漢字仮名交じりという形態が工夫発案され、これで表記されてきたということに関わる。日本語では、理論的・道徳的な部分は漢字で書かれる。一方、江戸時代の国学者も注目したように、感情、情動、気分といったものは仮名でしか書けない。世界史的に見れば、ここには自国の言葉で自国の「内面」を表現するというロマン派的な流れと一致する（柄谷 2011：160-161）。

西田幾多郎は柄谷や小林のように、辞、「てにをは」の働きを表面上は詳しくは解明していないが、そこには潜在的にせよ、この問題への認識があるというのも柄谷の説明するところである。西田の言う「無の場所」は、時枝誠記（2007）の「ゼロ記号」にあたり、国学者の言う「辞」にあたる（柄谷 2011：161）。柄谷が引用する時枝の議論は興味深いが、筆者がとくに関心をそそられたのは、時枝（2007）の以下のような説明である。

時枝は、A「主体」、B「主体それ自身の直接的表現である辞」、C「主体に対する処の客体界」、D「客体界の概念的表現である詞」の４つの契機で例えば「花よ」という詞辞の連結について考えてみる。まず、最初にあるのはＡＢという「拡大した主体」であり、これがＣＤという客体を「包み込む」。「花よ」の場合は、「よ」が感動を表すのであるが、この「よ」によって、ＣＤの客体界とＡＢの主体的感情は融合する。辞自体は意味を持たないが、これがＡＢとＣＤの融合過程で大きな働きをする。まさに、本居宣長の弟子の鈴木朗が言ったように、詞という器に対し、これを使う手としての辞の働きが重視されるのである。これを言い換えれば、辞が包むものであり、詞が包まれるものであるということになる（時枝 2007：266-267）。

日本的観照の視点は、客体に関わると同時に主体に関わるという二重構造をもつというのが本稿での結論だが、だとすると、これは日本語の詞と辞の関係を反映しているとも言える。詞や辞の働きの解明、あるいは実際に詞と辞を日常の文や表現の中で使うということで、日本人は、この二重の関係に対して感覚的に鋭い意識を保っているということになるのかもしれない。実際、小林秀雄はそう考えたようである（小林 1979）。言語的な構造と観照的意識の関連については他の国のケースも含めてさらに考える必要がある。

Ⅷ. 結論および今後の課題

本稿では、「もののあわれ」的ものの見方、「世間・運命観」的なものの見方に関して、実証的なデータの分析と仮説として提示された図式（日本的「内面」が「経験」と「観照」の二重構造からなるという図式）とをいわば融合させる形でその内実を明らかにしようとしてきた。その結果、仮説として提示された日本的「内面」の二重構造という図式はかなり説得力のある妥当性の高いものとして見えてきたと言って良いだろう。さらに、こうして得た知見をアジアの事例と比較することで、アジアの人々の「内面」に関しても今までになかったものが見えてきているとも言えよう。一般に日本と東アジアの住民は、個人主義的な価値観が強い欧米の人々と比較して、「集合的意識」、「集団主義」への指向性という点で共通性がかなりあるというイメージが広まっているようにも思えるのだが、本稿の研究で明らかになったように、「間人主義」的な価値観という点で見ると、たしかに共通性が見られる。さらに、このような共通性は、「天譴論」や「運命論」への共感といった点にも及んでいる。「もののあわれ」的な価値観・ものの見方について東アジアの人の前で話すと必ずしも十分なイメージが伝わらないという印象を受けるが、少なくとも「もののあわれ」と関わる「自然観」、「運命観」、「清貧」の思想等という点では、潜在的には日本と東アジアの人々は共通のものの見方をしている。今回の調査では東南アジアの調査データも分析し、「間人主義」への指向性、「天譴論」、「運命観」等への共感は東南アジア（具体的にはベトナム）の人々にも見られる傾向であることを明らかにした。本稿でも指摘したように、このような価値観、ものの感じ方は、広く情報社会における人々の生き方全般にまで関わっている可能性がある。その意味で、今回の研究の意義は大きいと思う。筆者の知る限り、このようないわば「深層」レベルにまでおりて、情報社会に生きる人々の価値観の実態を明らかにした研究は他には例がない。今後の課題であるが、すでに調査の実査は終了しているタイの調査の分析を進めるとともに、2015、2016年に実施した中国、韓国調査のデータも再度分析してみたい。「観照的視点」に関する比較文化的分析も今後の課題である。

参考文献

家永三郎　1947『宗教的自然観の展開』斎藤書店。
―― 1969『日本思想史に於ける否定の論理の発達』（オリジナル版は1935年）新泉社。
柄谷行人　2011『＜戦前＞の思想』講談社。
フロム，エーリッヒ　1970『希望の革命』佐田啓一・佐野哲郎訳，紀伊国屋。
小林秀雄　1954『私の人生観』角川書店。
――1979『本居宣長』新潮社。
佐藤直樹　2001『「世間」の現象学』青弓社。
清水幾多郎　1970「日本人の自然観」（オリジナルは昭和35年）『人間を考える』文芸春秋，146-185頁。

時枝誠記　2007『国語学原論　上』（原典は1941年に出版）岩波書店。
仲田誠　2017「「世間・運命観」と東アジアの情報社会―技術・人工物・ロボット・災害・プライバシーと日本・アジア的価値観―」『筑波大学地域研究』第38号，19-36頁。
日置弘一郎　1993「東アジアの組織行動」濱口惠俊（編）『日本型モデルとは何か』新曜社，385-399頁。
丸山真男　1964「超国家主義の論理と心理」『増補版　現代政治の思想と行動』未来社，11-28頁。
三上章　1960『象は鼻が長い』くろしお出版。
Adorno, T., E. Frenkel-Brunswick, D. Levinson and R. N. Sanford 1950 *The Authoritarian Personality*. New York, Harper.
Feenberg, Andrew 1995 "The Problem of Modernity in the Philosophy of Nishida." in John Heisig and John Maraldo (eds.), *Rude Awakenings: Zen, the Kyoto School and the Question of Nationalism*, Honolulu:, University of Hawaii Press, pp. 151-173.
Kitano, Naho 2006 "'Rinri': An Incitement Towards the Existence of Robots in Japanese Society", *International Review of Information Ethics* 6, pp. 78-83.
Nakada, Makoto 2006a "Privacy and Seken in Japanese information society: Privacy within Seken as old and indigenous world of meaning in Japan", in F. Sudweeks, H. Hrachovec and C. Ess (eds.), *Cultural Attitudes Towards Technology and Communication 2006*, Perth, Murdoch University, pp.564 -579.
Nakada, Makoto 2006b "The Internet Within Seken as Old and Indigenous World of Meanings in Japan", in R. Capurro,　J. Fruebauer and T. Hausmanninger (eds.), *Localizing the Internet*, Munich, Fink Verlag, pp.1-30.
Oberman, L. M., J. P. McCleery, V. S. Ramachandran and J. A. Pineda 2007 "EEG Evidence for Mirror Neuron Activity During the Observation of Human and Robot Actions: Toward an Analysis of the Human Qualities of Interactive Robots", *Neurocomputing* 70 (13-15), pp. 2194-2203.